三

磐音は南町奉行所定廻りの木下一郎太と、南蛮の薬や漢方薬を扱う日本橋の肥前屋の店先に立った。

中川淳庵と別れたあと、薬箱持ちの善三郎の頭部が送りつけられたことも考え、南町奉行所の笹塚孫一を訪ねて、相談したのだ。

「なんとまあ、次から次へと事件を抱え込むことよ。そなた奉行所以上だな」

と呆れた孫一が大頭を捻って沈思した後、

「そなたが美濃部に約定したこともある。まずは内々に探索いたそうか」

と請け合った。

「鍵は、そなたの知り合いの医師が入ったように阿片だぞ」

と配下の一郎太を呼ぶと、

「事件の仔細は、道々この旦那から聞け。肥前屋に参って、本所松倉町の医師不知火現伯がどの程度、阿片を購入していたか、肥前屋に問い合わせてみよ」

と指示した。さらに、

「現伯の屋敷が松倉町、妾の家が四ツ目近くなれば、地蔵の家をわれらのつなぎ場所といたせ」

と命じたのだ。

「御免」

定廻り同心の訪問に肥前屋の番頭が、

「ご苦労様にございます。なんぞお調べですかな」

と帳場格子から立ってきた。

「造作をかける」

一郎太は応じると用件を述べた。

「川向うの不知火先生がうちから阿片をいくら買い求めておられたかというお尋ねでございますな。それははっきりしております、これまでお買いになったことはございません」

「ならば、他の薬もないか」

「いえ、それはございます」

「阿片はない。となれば、痛薬などを購入できる南蛮薬種屋はほかにあるか」

「漢方を扱う薬種屋には、阿芙蓉の名で売られておりますが、まず大所はうちにございましょう。必要ならば、現伯先生もうちで仕入れられるはずにございます」

と番頭は言い切った。

一郎太はなにか訊くことがあるかという顔で磐音を見た。

磐音は首を横に振った。

「邪魔したな」

二人は店を出た。

「本所の法恩寺橋近くに地蔵の竹蔵と呼ばれる十手持ちがおります。まずはそこへ顔を出しますか」

一郎太が磐音を誘った。笹塚が地蔵の家を連絡場所にせよと命じたのは御用聞きの家か。

二人は日本橋から江戸の待ちを南西から東北に抜けて、大川に出た。

両国橋を抜けると東広小路の賑わいを見ながら、竪川に沿って北辻橋まで行き、横川へと入った。

江戸湾に入った弁才船から積み替えられた、藍玉などを載せた荷足り舟が往来する横川を北へ向かい。

その東の橋詰に地蔵様が鎮座して、赤い衣を着せられていた。

一郎太は、その地蔵の前にある小体の蕎麦屋、地蔵蕎麦の店に入っていった。表口は横川ではなく、横手の辻に開いていて、そのせいか店の佇まいはひっそりとしていた。だが、店の中は船頭や人足などで込み合っていた。

「木下の旦那、おいでなさいませ」

と釜の前に立っていた中年の女が一郎太に挨拶して、姉さん被りを脱ぐとすぐに二人を奥の居間に案内した。

奉公人は男と女、それぞれ一人ずつだった。釜の前には、代わりに若い男が立った。

「うちのは、笹塚様の命で松倉町まで出向いております。木下様がお見えになったらこちらでお待ちを、と言い残して参いりましたから、おっつけ戻って来ましょう」

と言うと、勝手に向かい、

「ざる二丁」

と叫んだおかみさんは、二人を神棚のある居間に残して、店に戻った。

「蕎麦屋を営むかたわら南町の十手を預かる竹蔵は、蕎麦屋の親分とか、地蔵の親分と呼ばれてましてね、人柄もさることながら蕎麦の味が絶品なんです」

一郎太、舌舐めずりした。

「何度か前を通ったことがありましたが、蕎麦屋には気が付きませんでした」

「入口が横川へ向かいていませんからね。ですが蕎麦の味は知る人ぞ知る、なかなかの風味です」

そんなことを話していると二人の前に蕎麦切りが運ばれてきた。つなぎなしの生蕎麦で、色は浅黒いが腰のありそうな蕎麦だった。運んできたおかみさんが、

「若い旦那方には、渋茶より蕎麦でございましょう」

と膳を置いた。

「地蔵を訪ねるのは、これが楽しみなんですよ」

一郎太が嬉しそうに笑い、箸に手を伸ばすと、

「坂崎さんも召し上がってみてください」

と勧めた。

「いただきます」

食べることになると磐音も遠慮はない。

「これは美味しい」

一口啜った磐音は呻いた。

蕎麦粉八につなぎ二の二八蕎麦よりも口の中で蕎麦の香りがふわりと広がって、どこか野趣のある蕎麦だ。

磐音は黙々と蕎麦を堪能した。そうこうするうちに、

「お見えになってたんですね」

と嗄れ声がして、蕎麦の色にも似た浅黒い顔の、朴訥そうな男が居間に入ってきた。

地蔵の親分の竹蔵だ。

「木下様、北割下水を挟んで対岸の新町に、うちの知り合いが菅笠職人をやっておりやしてね、そこから不知火現伯の門前が覗けます。手先たちをそこへ張り込ませやしたし、裏口にも見張りを立て、割下水にも荷舟をつけてございます。なんぞあれば、すぐに知らせが入りまさあ。まあ、日の高いうちは動きますまい」

「手配りご苦労」

頷いた一郎太が磐音を、

「坂崎さんは六間堀の住人でな、よろしく頼む」

となんとも曖昧に紹介した。だが、探索にはいろいろな人物が関わることを承知する竹蔵は、

「ご昵懇に願います」

と頭を下げた。

「不知火屋敷だがどんなふうだ」

「相手から手紙が届くのをまっているって感じで、ひっそり閑としてまさあ」

「笹塚様から経緯は聞いたか」

「へえ、使いの口上でざっとお聞きしました」

頷いた木下が、南蛮の薬を扱う肥前屋で聞き込んだことを老練な手先に告げ、

「現伯の評判はこの界隈で芳しくねえようだな」

「芳しくも何も、手前どものような者は相手にもしてくれませんでねえ」

と嘆息した竹蔵は、

「いえ、十何年も前は、撃ちのかかあも世話になったことがありまさあ。気さくそうな徒歩医者でしたが、すぐに陸尺の担ぐ乗物に納まって尊大になりやがった」

と言ったところに女房が茶を運んできた。

「おまえさん、それは違うよ。あたしゃねえ、最初っから現伯先生の油断のならない目が嫌いでねえ、あれはなにか下心のある目だ。確かに風は直してもらいましたよ。でも、その後一度だって、頼ったことはない」

「頼るもなにも、間口三間の蕎麦屋なんぞは当ていにしてもらえねえよ」

と竹蔵が笑った。女房が店に戻るのを待って、一郎太が訊いた。

「妾のお常はどうだ」

「出入りの魚屋に聞きますと、お屋敷務めをしていたにしてはえらく細かいのだそうで、魚の活きが悪かった、いや、小さかったなどと、後から値引きさせることもままあったとか」

「値引きくらいで拐かされちゃあ、江戸じゅうのおんあどもが姿を消すぜ」

「それはそうですが、長屋のかかあは、一文の値引きがたつきに関わってきます」

「そいつは確かだ」

「現伯どのの奥方をご存じですか」

磐音が竹蔵に訊いた。

「石原町の座頭、一の矢の娘のお万でしてねえ、現伯が徒歩いshあから乗物医者に格好を掛けた背景には、一の矢のところから金が出たという話しです。それだけに一の矢が死んだ今も現伯は頭が上がらないそうで」

揉み治療をお上から許された座頭たちは、公許の金貸しをして大金を持っている人間が多い。

「お常どのを外に囲われたことについてはどうですか」

「そりゃ、近所で評判になるくらいの悋気をお万が見せたって話ですから、決して快く思っちゃおりますまい。ですが、旦那方、お万が知恵を絞って、旦那を拐かすなんて話はまずございませんや。どこか頭が緩んだような女なんで」

さすがに地元のこと、竹蔵はいろいろと承知していた。

「ただねえ、お常は一筋縄ではいきませんぜ」

「ほう、どういうことか」

一郎太が訊いた。

「わっしは現伯の屋敷の手配りをした後、亀戸村を回ってあちらこちらと聞きこんできたんでさ。ひょっとすると、お常には男がいるかもしれませんねえ。迎えの屋根船が来て、しばしばでかけているんですよ。むろん、現伯は知っちゃいませんがね」

「いつごろからか」

「半年も前からだそうで」

一郎太が頷き、

「小女のおちよめ、内緒にしてやがったか」

と事情を竹蔵に告げた。

「なんですって、あの家に小女がいますんで。徒労かもしれねえが、わっしがちょいと訊いて参りましょう」

竹蔵が気軽に腰を上げた。

事件が動いたのは、その夕刻だった。

不知火現伯の屋敷の表戸を叩いた棒手振りが敷地に消えた。

菅笠屋の才次の家から見張っていた地蔵の親分の手先たちがまず親分の家に知らせに走り、一人がいつでも棒手振りの後をつけられるように待機した。

空籠を天秤棒の端に提げた棒手振りが不知火現伯の屋敷から出てくると、横川へと向かった。手先が対岸から尾行していく。

「ありゃあ、一味ではありまいぜ」

と応じた竹蔵が、

「松倉町を離れたあたりで野郎を捕まえねえ」

と手先に命じた。

へえっ、と畏まった手先が棒手振りを追っていき、間を置いて竹蔵もそのあとを付けた。

一郎太も磐音も従った。

竹蔵の手先が棒手振りに声をかけたのは、中之郷横川町、業平橋の手前だ。

「おめえさん、ちょいとまってくんな」

手先のかたわらには竹蔵らも追いついていた。

振り向いた棒手振りは地蔵の親分の顔を見て。

「親分さん、なんぞ御用で」

とのんびりと問い返した。

「小梅村の安吉さんかえ」

「へえっ」

「安吉さん、おめえさん、不知火現伯の屋敷に入ったが、何の用だえ」

「手紙を言付かりましてね、届けただけなんで」

「だれに、どこで言付かった」

「北割下水のどんづまり、源光寺の前でしたよ。婀娜っぽい女が、現伯屋敷の戸口に手紙を届けてくれたら、駄賃を一朱くれるというんで。親分、拙かったかねえ」

「安吉は腹掛けから一朱を出してみせた」

「婀娜っぽい女だと。年はいくつぐらいで、風体はどうだえ」

安吉は記憶を辿った。

「二十七、八の年増だが、どこか小粋でさ、震えあがるような美形だ。頭は櫛巻き、着物に南蛮の切れ地で仕立てたような、ふんわりしたものでしたぜ」

「江戸者にしては変わった形だな」

「親分、あてにはならないが西国訛りがあったようでさ。江戸の女でも上方のでもなかったよ」

「よう見たな」

竹蔵に褒められた安吉は、へっへっと笑った。

「現伯屋敷の様子はどうだったい」

「あっしが届けた結び文を恰幅のいい侍が受け取ってよ、すぐに開いたら、うんすん骨牌が一枚地面に転がり落ちやがった。なんのまじないかねえ」

拐かした下手人からだ。恰幅のいい侍が美濃部三五郎だろうと磐音は思った。

「手紙を受け取った侍は、手紙を読んだか」

「結びを開いて、やはり五千かと呻きましたぜ」

「やはり五千と言ったか。で、その後、どうした」

「手紙を持ってさ、奥に駆け込んでいった。それだけでさ」

竹蔵が一郎太を振り見た。

「親分、あっしの知っているのはそれだけだ。もう帰ってもいいかい」

と安吉が言った。

「あとでお呼び出しがあるかもしれねえが、今のところはいいや」

安吉が名残り惜しそうに一朱を竹蔵に差し出した。

「おめえの稼ぎだ。貰っておきねえ」

安吉が嬉しそうに腹掛けにしまうと早足で家路についた。

暮れ六つの金が本所に響いた。

「どうやらお万の指図で、五千の身代金を値切った様子ですね」

竹蔵が一郎太に言った。

「だが、値引きはならなかったか。それにしてもご占領とは大した額だぜ。いくら不知火現伯でも、掻き集めるのに苦労しよう」

「木下様、不知火屋敷の金蔵には千両箱の五つや六つ、転がっているという噂でね、金はありましょう。だが、身代金を値切ったお万がすんなり出すかどうか」

「亭主の命がかかっているんだぜ」

「ですがお常のことがありますからねえ」

竹蔵が顔を捻った。

磐音は竹村武左衛門の命もかかっているので、見せ金でもいい、お万が五千両を用意してくれないかと願った。

「ともかく不知火屋敷が動き出すのは、もうちっと刻限が遅くなってのことだろうよ」

と一郎太が言った。

「地蔵、笹塚様にこのこと、知らせてくれぬか」

頷いた竹蔵親分が手下に南町まで走ってこいと命じた。

「まあ、おれの勘だと夜半の九つ過ぎだな」

と一郎太が言い、

「菅笠屋の才次の家に行こうか」

と、だれに言うともなしに言った。

「木下どの、それがし、竹村武左衛門の家族に会って参る。心配していようからな」

「南割下水の竹村の旦那も拐かされているんですかえ」

磐音の言葉を聞いた竹蔵が、竹村のことを承知しているのか、応じた。

「さよう、一日二分の用心棒として雇われていたのです」

「酒代欲しさに危ない仕事に手を出したってやつだ。人は悪くねえが割けに弱くてねえ」

という竹蔵の口ぶりから、地蔵の親分の手を煩わしたことがありそうだ。

「すぐに菅笠屋に戻ります」

と言う磐音に竹蔵が、

「戸口は閉まっていても、前に商売物の割竹やら菅なんぞが立てかけてありますさあ。脇の路地を入ってくだせえ、裏口がございます」

と見張り所の才次の家を教えた。

南割下水のごみ溜めと、界隈の屋敷から呼ばれる本所吉岡町の半欠け長屋はいつにも増してひっそりとしていた。

磐音が竹村武左衛門の破れ障子の前に立ち、

「御免」

と声をかけると中から障子が引き開けられ、柳次郎が顔を覗かせた。

「どうです、なんぞ動きはありましたか」

柳次郎の背後からぞろおろと早苗ら武左衛門の子供たちが顔を覗かせた。

「父上はご無事ですか」

子供たちにも父親の危難は知らされているようだ。

「中に入らせてもらえぬか」

早苗や柳次郎らが一声に奥へと引き下がった。

正月と違って長屋の中は雑然として、足の踏み場もない。家財道具に袋貼りなどの内職に使う道具が産卵しているせいだ。

妻女の勢津が磐音に頭を下げた。

「坂崎様には、いつもいつもお心遣いを頂きまして申し訳ございません。姑息にも手当のよきほうに鞍替えして、安い仕事を坂崎様に押し付けたりするものですから、かような目に遭うのです」

と言い切った。

「まあ、そう申されますな」

と応じた磐音は、上がり框に腰を下ろして、心配を掛けないところで経過を告げ、

「おそらく今場撃ちに相手方と接触できましょう。となれば、竹村どのを助け出す機会も巡ってきます。朝にはなんとしても竹村どのをこちらにお戻ししたい」

と報告を締めくくった。

菅笠屋に戻ろうと立ち上がる磐音に柳次郎が、

「役には立つまいが、それがしも参りましょう」

と同道を願った。

どうやら柳次郎は、勢津の愚痴と子供立ちの相手にうんざりしていた様子だ。

「助かります」

そう言う磐音に柳次郎が大きく頷き返した。